

モナキウム・サクルム

——「キリスト教国」バイエルンでのカトリシズム体験(1)——

今 野 元

序

「バイエルンはキリスト教国である」——バイエルン自由国首相ホルスト・ゼーホーファー（CSU）が「ズデーテン＝ドイツ人大会」（2012年5月27日・ニュルンベルク）でこう喝破したように、キリスト教、特にカトリック教会の習俗を州の基軸に据えようとするバイエルン政府の方針は明確である。バイエルン国歌は「汝バイエルン人の地、ドイツの大地、祖国よ、神が汝と共にあらんことを」（Gott mit Dir, Du Land der Bayern, deutsche Erde, Vaterland!）という一節で始まる。バイエルン州の祝日も、主にカトリック教会の行事に準拠している。バイエルン州議会のあるマクシミリアネウムにも、しばしばバイエルン州の公立学校、公共施設にも、十字架上のイエス像（Kruzifix）や十字架が掲げられているのである。2013年4月16日の教皇ベネディクトゥス一六世の85歳の誕生日には、ゼーホーファーに率いられたバイエルン政府の全閣僚と民俗衣装の大集団がローマを大挙参上し、バイエルン出身の聖父に故郷の祭典を届けた。

筆者は平成24年度長期学外研究員（愛知県立大学）としてミュンヘンに10箇月滞在した際、バイエルンのカトリック的風土の見学を課題の一つとした。これはドイツ語圏の文化的多様性に対する関心ゆえのことである。14年前のベルリン留学に際して、筆者は首都移転、東西ドイツ人対立、東独復興、オスタルギーの実地検分を行ったが、今回はカトリック的風土を残すバイエルンで、また別な経験が出来ることを期待したのだった。

バイエルンでのカトリシズム観察は、筆者の教皇ベネディクトゥス一六世研

究と表裏一体を為すものでもある。ヨーゼフ・ラッツィンガーは「神学の神童」と呼ばれた学者だが、彼の情念の源泉は、実は知性とは余り関係のない、バイエルン農村部のカトリック的生活世界にあるように思われる。そこで筆者は、ラッツィンガーの言動を振り返るに当たり、その原点を見ることが必要と考えたのである。

第一章 ミュンヘンの宗教行事

(1) 復活祭

筆者がミュンヘンに着いた2012年4月3日は、西方教会では復活祭前「聖週間」の火曜日に当たっていた。イエスのイェルサレム入城を記念する「枝の主日」は、既に4月1日に終わっていた。

到着後の手続等で落ち着かなかった筆者は、2012年4月5日の「緑の木曜日」(Gründonnerstag)を自宅で無為に過ごしてしまった。この日の夕方には、最後の晩餐を象徴するミサが行われたはずである。筆者は1年後の2013年3月28日にベルリンの聖ヘトヴィヒ教会で、「緑の木曜日」のミサが実施されているのを見た。人民祭壇の十字架は白い布で覆われ、音楽は控え目で、ベルリン大司教ライナー・マリア・ヴェルキ枢機卿が、選抜された信徒10名ほどの足に水をかけて洗い、白い布で拭くという儀式を行った。前年4月5日のミュンヘン大聖堂でも同様だったはずである。

復活祭の名物に色付けをされた卵があり、これは兎が運んでくるものとされている。ミュンヘン新市庁舎前のパン屋リシャルトでは、兎や卵の形のチョコレートを組み込んだ大きなパンが売られていた。

2012年4月6日は「聖金曜日」であり、ドイツ全土が祝日となって、15時から教会でイエスの処刑を記憶する「キリストの苦難と死の祝祭」(Feier vom Leiden und Sterben Christi)が行われた。この日の教会では、司教・司祭が大きな十字架を抱えて、堂内を一周することになっている。これはイエスが刑場の「ゴルゴダの丘」まで十字架を担いだ故事に由来する。ローマでは、ベネディクトゥス一六世がコロセウムでこの儀式を行ってきた。ミュンヘンではミサの後、参列者一同が中央祭壇下の地下聖堂(Krypta)に参詣した。そこにはイ

エスの棺桶が花に囲まれて安置されており、非常に重苦しい沈黙に包まれていた。

聖土曜日の2012年4月7日夜、教会では21時から「復活の夜の祝祭」(Feier der Osternacht)が行われた。ミサが終了した時には、既に24時を回っていた。こののち4月8日10時、4月9日(復活祭月曜日)10時、4月16日(「白の主日」(Weißer Sonntag))10時にも典礼が行われたが、これには参加できなかった。

(2) 聖体祭

2012年6月7日は聖体祭(Fronleichnam)であった。聖体祭は、聖体「ホスティア」(Hostie:無発酵パン)が黄金に輝く「聖体顕示台」(Monstranz)に入れられ、町中を渡御するという儀式である。これは日本でいえば、御神体を入れた神輿が町中を練り歩くのと同じ発想である。かのマックス・ヴェーバーも、1919年に恋人エルゼの小屋があるミュンヘン郊外の村ヴォルフラーツハウゼンで、この聖体祭に興味をそそられた模様である¹⁾。カトリック地域では、聖霊降臨の2週間目に当る聖体祭は移動祝日になっている。この日はミュンヘンの中心街がカトリック色に彩られ、その厳肅さは降誕祭や復活祭を上回る。筆者は既に2001年6月14日に史料収集中のウィーン中心街で聖体祭の大行列に遭遇しており、ミュンヘンのものにも期待していた。

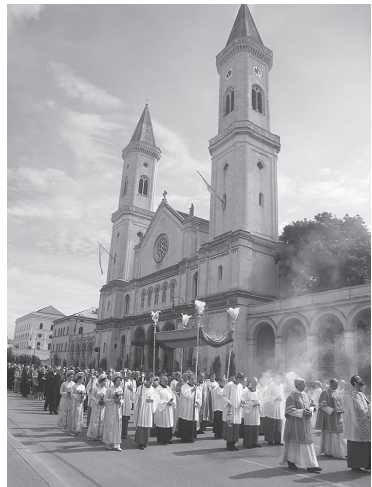
2012年6月6日、ミュンヘンの中心街で聖体祭の準備が始まった。將軍廟から凱旋門まで延びるルートヴィヒ通には、バイエルン自由国の官衙、裁判所、国立図書館、中央国家文書館が軒を連ねているが、そうした公共建造物の窓からは、赤や青の幕が垂らされ、地階には樺の木が飾られた。オデオン広場のルートヴィヒ一世騎馬像も樺で包まれた。「將軍廟」前の2本の巨大な旗竿には、普段は何も掛けられていないが、このときはミュンヘン・キンドルの描かれた大きな幡が掲げられた。

2012年6月7日、薄曇りのなか朝7時30分ころから人々がマリーエン広場に集まり始めた。マルタ騎士団、ドイツ騎士団、ドミニコ会など各種団体、大学、学生組合、「マリアの心兄弟団」など信徒団体が、旗を掲げ、マリア像、イエス像を担いで集まった。騎士団や大学の関係者は、独特の制服、ガウンを

まとい、準備された席に着いている。イタリア、クロアチア、ポーランド、韓国など、外国の信徒団体も参集している。シルクハットに燕尾服の市民団体もいる。革の前掛を付けた職人団体もいる。腰紐を巻いた修道士もいる。黒服の修道女の一団もいる。新市庁舎前には祭壇が設置され、多くの花が飾られ、合唱団が席に着いた。バイエルンの青白旗、ヴァティカンの黄白旗、ミュンヘンの黒黄旗が翻っている。

8時過ぎ、大聖堂の方角からオルガンの伴奏と共に釣香爐と十字架を先頭にミュンヘン＝フランジング大司教ラインハルト・マルクス枢機卿の行列が登場した。今回は前大司教フリードリヒ・ヴェッター枢機卿も同行している。合唱団の指揮者は、バイエルン風の衣装の女性である。人民祭壇に用意された聖杯は、参加者が多いため数十個に及んでいる。

9時40分過ぎにミサが終って駝鳥の羽の付いた天蓋が登場し、聖体行列が始まった。天気は青空となった。中心街はマリーエン広場からルートヴィヒ教会まで厳粛な雰囲気包まれ、人々は静まり返り、街頭の拡声器からマリーエン広場の合唱、祈禱文、吹奏楽が中継放送され、その中を長大な行列が進んでいく。行列はマリーエン広場からダルマイヤー、国立歌劇場、王宮、将軍廟と通り、ルートヴィヒ通へと進む。先頭は騎馬警官（男性4騎、女性2騎）が警固し、その後ろを十字架上の強大なイエス像が進み、学生組合や修道会などの団体が続く。釣香爐と十字架に先導された聖体は行列の中央に位置する。大司教は司教冠を脱ぎ、聖体顕示台を布で包んで恭しく捧げ、天蓋に守られて進む。聖体が進むにつれ、侍者が鳴らす鈴が鳴り響き、いわば警蹕の役割を果たす。天蓋の周囲は、黄金の衣装に身を包み、花束を持った東南アジア系の女性9人が警固している。聖ルートヴィヒ教会（ミュンヘン大学教会）の前には祭壇が



聖ルートヴィヒ教会前を歩む聖体行列
(6月7日ミュンヘン)

設けられ、行列の先頭はそこで折り返す。折り返してきた行列の先頭は、バイエルン農林省の前でマリーエン広場から進んできた聖体と遭遇した。行列の先頭の人々は跪いて聖体に敬意を表した。しかし全員が跪いたのではなく、立ち止まるだけのものも多かった。

10時半からルートヴィヒ教会前の祭壇で聖体讃美式が始まった。大司教がラテン語の祈禱文で典礼を締め括った後、聖体は11時過ぎにはマリーエン広場に還御し、感謝の大合唱で荘重な儀式は終りとなった。

(3) 年末年始

年末年始の行事は、キリストの降誕を中心に行われる。2012年12月2日が待降節第一主日、12月9日が同第二主日、16日が同第三主日、23日が第四主日に当て、24日が聖夜、25日が降誕祭第一日、26日が降誕祭第二日に当てていた。大晦日はジルヴェスター (Sylvester) と呼ばれ、元旦は「神の母マリアの祝祭」(Hochfest der Gottesmutter Maria) の日とされている。1月6日は聖三王祭 (Heilige Drei Könige) であった。

待降節といえは名物は「クリスマス市」(Weihnachtsmarkt) である。待降節第一主日前の月曜日、2012年11月26日の17時に、マリーエン広場を中心とする「クリストキンドル・マルクト」(Christkindlmarkt) が始まった。クリスティアン・ウーデ市長 (SPD) が開会宣言を行い、ファンファアレや合唱のあと新市庁舎前のクリスマス・ツリーの電飾が燈された。クリスマス市は、場所によって呼び名が異なるが、ミュンヘン中心街では南ドイツ風にそう呼ばれていた。王宮中庭のものは「クリスマス村」(Weihnachtsdorf) と呼ばれ、ヴィッテルスバッハ広場のものは「中世クリスマス市」(Mittelalterlicher Weihnachtsmarkt) と



ミュンヘン新市役所前のクリスマス市 (11月27日)

呼ばれていた。

クリスマス市はドイツの伝統文化を演出する機会である。クリスマス市は、(日本の「露店」より遙かに丈夫な)木造仮設店舗が軒を連ね、グリュエヴァイン、ヴルスト、ポム・フリッツ、ブラートカルトツフェルンという定番のドイツ料理を供するほか、クリスマスの家庭用装飾、エルツ山脈の木工細工などが販売される。筆者は2012年にバイエルン、エステルライヒ、ライン＝メイン川流域、ベルリン、ザクセンなどのクリスマス市を数多く見て回ったが、そこで気が付いたのは、クリスマス市で提供される食品や商品がどこも古典的なもので、ピッツァ、ケバブ、中華、和食など近年ドイツで進出が著しい外来系軽食が見られないという点である(但しケルンのクリスマス市では一軒だけ中華料理の店舗を見た)。

待降節には多くの家庭で華やかな装飾がなされる。日本でもお馴染みのクリスマス・ツリー(Weihnachtsbaum)は、本物の樅の小さな木が毎年販売され、家庭内に設置され電飾や玉が飾られる。日本では普及していないが、「待降節の冠」(Adventskranz)と呼ばれる、4つの蠟燭を取り付けた樅の輪も飾られる。これは待降節主日が訪れるたびに1つずつ蠟燭に点火するもので、第四主日には全ての蠟燭に点火され、クリスマスが間近に迫ったことを実感するのである。これ以外にもイエスの誕生を告げた星に因んだ星形の電飾、エルツ山脈名産の「ピュラミーデ」(Pyramide: 蠟燭の暖気で回転する円錐形の木工細工)などが定番である。クリスマスの家庭用装飾は、家族で楽しむだけでなく、窓辺に置いて道行く人にも楽しませるものであり、町中がクリスマス・ムードに包まれる。これはバイエルン特有の光景ではなく、宗教色の薄いベルリンでも同じであった。

クリスマスの定番の菓子として、シュトツレンと聖ニコラウスのチョコレートがある。雪のように細かい砂糖を大量に塗した焼き菓子であるシュトツレンは、ドレスデンの名産品として知られるが、今日では日本でも売られており、勿論ドイツでも各地域でお馴染みである。聖ニコラウスのチョコレートは、司教冠を被り聖職者の恰好をしているものと、アメリカの「サンタクロース」のように白の縁取りのある赤い衣装を着たものがあるが、いずれにせよクリス

マス・プレゼントに好まれる商品の1つである。

クリスマスの聖歌としてドイツ語圏で特に好まれているのが、「きよしこの夜」(Stille Nacht, Heilige Nacht)、「神の御子は今宵しも」(Adeste Fideles)である。「きよしこの夜」はザルツブルク郊外の村オーベルンドルフで、オルガンが壊れた



聖ニコラウスのチョコレート (12月29日ハーメルン)

ためにギター伴奏用に作曲されたという聖歌で、ドイツ語圏では勿論ドイツ語原版で歌う。「神の御子は今宵しも」はラテン語の聖歌で、起源はよく分かっていないが、イギリスを追われた親カトリックのジェイムズ二世派(ジャコバイド)がチャールズ三世(小僭王)の誕生を祝する意味を込めて作曲したと言われている。因みにジェイムズ二世派が現在正統なイングランド王と認める人物は、ミュンヘン・ニュンフェンブルク城に在住のヴィッテルスバッハ家家長、フランツ・フォン・バイエルン公である。

2012年12月24日には、22時から降誕祭夜半の礼拝(Christmette)が行われた。21時30分にミュンヘン大聖堂に赴くと、既に座席はすっかり埋まっており、周囲も人で一杯であった。普段の日曜日のミサと異なり、堂内の作法を知らない観光客の姿も多く見られた。教役者が入場する道を整理係が確保するのも、物見高い見学者が溢れて大変という状態である。22時を過ぎたころ、薄暗くされた堂内に(正面玄関が工事中であるためか)北側の入口から、釣香爐と十字架を先頭に教役者たちの行列が入場し、ミサが始まった。事情があって中座したが、聖体拝領のあと「きよしこの夜」、「神の御子は今宵しも」の合唱があってミサが終ったのは、24時過ぎであったと思われる。こののち12月25日、26日には更にキリストの降誕を祝うミサが行われた模様である。

2012年12月31日には、16時から大司教マルクス枢機卿の年末の説教があり、大司教が退席したのち人民祭壇に聖体顕示台が置かれ、席に残っていた信徒を

相手にミサが行われた。マルクス枢機卿の説教は、資本主義の暴走を戒め、人間の連帯を訴える趣旨のものであった。こののち大聖堂ではもう儀式は行われなかったが、1月1日の0時にはマリーエン広場を囲む教会が一斉に鐘を鳴らした。尤も広場周辺に集まった群衆が、思い思いの花火を一斉に放ったため、広場にいても鐘がよく聞こえないほどであったが。

2013年の元旦は「神の母マリアの祝祭」(Hochfest der Gottesmutter Maria)の日である。パイエルン放送は9時25分から11時45分まで、ローマの聖ピエトロ大聖堂より教皇ベネディクトゥス一六世の司式による典礼を中継放送した。パウルス六世の1968年以來、1月1日はカトリック教会では「世界平和の日」とされている。黄金の司教冠に白い祭服をまとった85歳のベネディクトゥス一六世は、ラテン語で祝福の祈禱文を読み上げたが、声がかすれ憔悴している印象を受けた。この時は予想だにできなかったが、この一箇月余りのち、教皇は退位の意向を表明したのだった。10時15分から11時15分までは、第二ドイツ放送(ZDF)でドレスデン聖母教会からの新年礼拝の中継放送があった。この教会からの新年礼拝中継は、2013年で7度目であるという(つまり聖母教会が復元されて以來ずっと続いていることになる)。プロテスタント・ザクセン領邦教会の監督ヨッヘン・ボールの祭服は、全身黒ずくめで白のリボンを垂らしたもので、日本の女性裁判官の法服に似ている。中継が終る前に、筆者はミュンヘン大聖堂に向かい、マルクス枢機卿司式のミサの最後の部分に立ち会った。このミサは13時に終了した。

2013年1月6日は聖三王祭(Heilige Drei Könige:公現祭とも)であったが、この前の数日間各所で「星の合唱団」(Sternsinger)という子供の集団が家々を回る様子を目撃した。「聖三王」というのは、日本では通常「東方三博士」と呼ばれるが、ドイツ語



リーデンハイム(フランケン)の「星の合唱団」
(1月6日)

圏では「博士」ではなく何故か「王」と呼ぶ。3人の名前はカスパル、メルヒオール、バルタザールというが、「星の合唱団」が訪ねた家の玄関の扉には、2013年であれば「20 * C + M + B + 13」などといった祝福の印が白墨で書かれる（或いはそういうシールが張られる）。「星の合唱団」は、三王に扮し中近東風の恰好をした、10代前半位の三人の子供（そのうち一人は黒人に扮して顔を黒く塗る）からなり、更に三王を導く「ベツレヘムの星」の飾りを掲げる子が一人加わる場合がある（加わらなければ三王のうち一人が星の飾りを持つ）。三王のうち一人は、釣香爐を持っている。予定に従い「星の合唱団」が訪問すると、家人が扉を開けて歓迎する。「星の合唱団」は玄関前で祈禱文を唱え、釣香爐を振って合唱し、これに対して家人がお礼に献金をする。日本の獅子舞を想起させる儀式である。筆者が見かけたのは、1月3日にトラウンシュタイン郊外のフーフシュラク（ベネディクトゥス一六世の少年時代の居住地）及びトラウンシュタイン市内、1月6日にリーデンハイム（ヴェルツブルク郡）においてであるが、ミュンヘンでも聖ルートヴィヒ教会、聖血教会（ヨーゼフ・ラッツィンガーが助任司祭を務めたボーゲンハウゼン区の教会）で「星の合唱団」訪問に関する予告を見た。トラウンシュタイン市内、リーデンハイムでは、実際に歌っている光景を目にし、録画させてもらったが、合唱団の歌や口上は必ずしも一様ではなかった。

第二章 巡礼

大衆信仰の世界を知るには、行事を外面的に観察するだけでなく、一般信徒の世界に入り込まなければならない。筆者はカトリック教徒の巡礼に参加しつつ、彼等を間近で観察することにした。

(1) アルトエッティング徒歩巡礼

ミュンヘン到着直後、筆者はテレビで「トリアーの聖上衣」の開帳が2012年4月13日から一箇月のみ行われていることを知った。イエスが刑場で十字架に懸けられるまで着ていたという「聖上衣」は、数十年に一度公開されるたびに巨大な巡礼の波が起ってきた。特にカトリック教会とプロイセン王国

政府の近代化政策との齟齬が問題になりつつあった1844年の開帳の際は、鉄道という新しい交通手段にも助けられ、百万という巡礼者を生み出した。近年では1933年、1959年、1996年に開帳があり、やはり多くの参詣者を集めている。2000年初夏に見学した「トリノの聖骸布」と比較する必要もあったので、遠隔地だがこの町の様子を見に行くことにした。



トリアー大聖堂の「聖上衣」開帳（4月21日）

2012年4月20日夜にミュンヘン中央駅を出発した筆者は、21日午前5時に夜行列車でザールブリュッケン中央駅に到着し、乗り換えて7時頃トリアー中央駅に到着した。その足でトリアー大聖堂に向かうと、早朝にも拘らず開放されており、堂内中央のガラスケースに「聖上衣」が安置されていた。それは頭から被って着る形で、茶色に変色し皺が著しいものであった。既に参詣者があり、二人の守衛に守られ、厳粛な空気が流れていたため、写真撮影は憚られた。

トリアーの旧市街は、「聖上衣」関連の施設や宣伝物で一杯であった。中央広場には白い仮設案内所が設けられ、巡礼者に対応していた。大聖堂の裏手には、「聖上衣」の商標の入った蠟燭、ロザリオ、絵葉書など各種土産物を販売するテントも設置されていて、参詣客で大混雑していた。商店街には「聖上衣特売」と称して二割引の札を出している靴屋もある。昼に近くなると、各地から巡礼者が大型バスで次々と訪れ、大聖堂では一日に何度もミサが行われ、押し掛ける巡礼者を捌いていた。何時のミサにどの団体が参加するかも予定されているようで、席に指定の表示がなされていた。その表示を見るに、団体客は「マルタ騎士団」(Malteser)の各支部などカトリック系の法人が多いようだった。堂内には修道士、修道女、消防団などの姿も見られた。

筆者はトリアーに続き、ミュンヘンで本格的な巡礼への参加を考えた。

ミュンヘン大聖堂では、ローマ、ファーティマ、ルルド、チェンストホヴァなどヨーロッパ各地への巡礼旅行の募集が出されていたが、筆者が希望したのはバイエルン内のそれであった。4月初旬に復活祭でミュンヘン大聖堂を訪れた際、筆者は大聖堂の信徒団体である「マリアの心兄弟団」(Herz-Mariä-Bruderschaft)の掲示に着目した。そこではアルトエッティング巡礼への勧誘が行われていた。ベネディクトゥス一六世がアルトエッティングと縁があるという話を知っていた筆者は、この巡礼に加わることにした。徒歩巡礼が4月28日から30日まで、バス巡礼が10月20日に計画されていたが、勿論興味が湧くのは徒歩巡礼の方である。

アルトエッティングは、「バイエルンの心」(Herz Bayerns)とベネディクトゥス一六世も呼んだ、有名なマリア信仰の巡礼地である。元来アルトエッティング(エッティング)は、バイエルン公タシロ三世、東フランク王ルートヴィヒ・ドイツ人王の時代から政治的に重要な都市であったが、のちには専ら宗教都市として知られるようになった。信仰の中心は小さな「黒きマドンナ」の木像(赤子のイエスを抱いた素朴なマリア像)で、今日では豪華な王冠や衣装を着せられて、広場中央の恩寵礼拝堂に安置されている。15世紀末に、この木像に関する二つの奇蹟があった。一つは、川に落ちて溺死した子供をこの像の前に置いたところ、蘇生したというもの、もう一つは、落馬して死亡した子供をこの像の前に置いておいたところ、突然元気に動き出したというものである²⁾。これ以来、アルトエッティングには巡礼者が押し寄せるようになり、熱烈なマリア信仰者であったバイエルン軍司令官ティリー伯爵は、恩寵礼拝堂のすぐ近くに自分自身の墓所(Tilly-Gruft)を設けたほどである。



アルトエッティング(4月30日)

2012年4月28日6時前、筆者はミュンヘン大聖堂(聖母教会)に出頭し

た。6時から巡礼参加者を対象にしたミサが行われるのである。教会にはまだ数人しか集まっていなかったが、見慣れぬ筆者の姿に驚いた様子であった。参加者は約106人で、年齢は10代から80代に及び、6割は女性である。企画者も60代の女性であり、従妹がこれを支援している。あとで聞いた話だが、筆者のような非カトリック教徒も混ざっているという。巡礼は伝統的な宗教行事ではあるが、背広にネクタイの筆者、尼僧姿の老婦人一人を除いては、皆ハイキングに出かけるような格好で、バイエルンでよく見かける皮ズボンやディルドルは見られなかった。ミサは6時15分頃より始まり、「マリアの心兄弟団」議長でもある大聖堂司祭・大聖堂参事会員ヴォルフガング・フーバー師の司式で聖体拝領が行われた。このときドイツ語での典礼にまだ慣れていない様子の黒人（コンゴ出身）司祭二人が補佐役を務めていたが、彼らはこのあと巡礼に同行することになる。巡礼団における非白人はこの黒人司祭二人と筆者だけだった。

7時前、大聖堂横に駐車したワゴン車に荷物を積んだあと、一行は大聖堂を出発した。大聖堂から早速歩き始めるのではなく、マリーエン広場からミュンヘン郊外のファーターシュテッテン駅までSバーン（S4）に乗るのである。Sバーンの中で、早速40代位の夫婦と話をした。この夫婦は、巡礼中担ぐ十字架に掛けられた大きなイエス像を持参しており、篤信の常連参加者である。夫は筆者に、カトリック教徒の間で有名な日本の逸話として、広島原爆投下の際、爆心地付近にあったイエズス会の建物が無傷で残ったという話をした。小賢しい人間の技術も、「神の母」（Mutter Gottes）の力には到底及ばないということだろうが、筆者は寡聞にしてそういう話を知らなかったので、そのときは相槌が打てなかった（後日の調べによると、爆心地から4・5キロメートルの「イエズス会長東修練院」という建物が、実際に比較的軽微な被害のみで倒壊、炎上を免れたらしい）。長崎の浦上天主堂が木端微塵になったという事実も頭を過ったが、敢えて筆者から積極的にそれを紹介するのは止めておいた。

8時頃、ファーターシュテッテン駅前で一行はしばし朝食休憩をとったあと、企画者から挨拶と説明があり、聖歌集などが配布され、行列を組んで歩き始めた。この時点で気温は18度であった。行列は概ね二列縦隊で、先頭を十

字架、「マリアの心兄弟団」の旗などを持った者が進み、その他後ろにも前述のイエス像などを持った者が続く。参加者が100人以上のため、行列は相当長くなる。参加者が疲弊すると、行列は更に長くなる。行列の前後には、4台ほどのワゴン車が同行しており、巡礼者が手ぶらで、或いはロザリオだけを持って歩けるよう荷物を運ぶほか、歩けなくなったものを收容し、水、ジュース、ビール、「ブレーツェ」（ドイツ・パンの定番「ブレーツェル」のバイエルン言葉）のみならず、巡礼者が休憩時に座る長椅子まで牽引している。行列は時折歩道のない自動車道の傍らを歩き、交通の多い自動車道を横切するため、蛍光色のベストを来た男性数人が行列の周辺で交通安全に気を配っている。

徒歩巡礼というのは、ただアルトエツティングまで楽しくハイキングをするのではない。それはそれ自体が修行であり、早朝から夕方まで歩きながら途絶えることなく祈りを捧げ、聖歌を歌い続けるのである。行列の中ほどに大きな拡声器を背負った男性がおり、彼が3日間祈禱を指導し続け、途中の礼拝堂でのミサではオルガン演奏も担当した。彼が祈禱文の朗詠を先導し、歌うべき聖歌を指示する。

繰り返し唱えられたのは、祈禱文「天使祝詞」のドイツ語版である。

Gegrüßet seist Du, Maria, voll der Gnade

Der Herr ist mit Dir

Du bist gebenedeit unter den Frauen

Und gebenedeit ist die Frucht ihres Leibes Jesus

Heilige Maria, Mutter Gottes, bitte für uns Sünder

Jetzt und in der Stunde des Todes, Amen.

目出度しマリア 恵み満ちみてり 主ともにます おみな女 祝せられ給
い 選ばれ給いて 御母となり給う 聖なるマリア 神の御母 我ら罪びと
のため執り成し給え いまもいまわも 然あれかし³⁾

こういった祈禱文の合間には、祈禱文「栄唱」をマリア信仰に合わせて変形したものがドイツ語で歌われる。

Ehre sei dem Vater, und dem Sohne, und dem Heiligen Geist,

Wie es war in Anfang und auch jetzt und alle Zeit

Ave, ave, ave Maria, ave, ave, ave Maria.

光栄は父と子と聖霊に帰す いまもいつも世々に至るまで

目出度しマリア 目出度しマリア

ファーターシュテッテンを出て、行列はしばらくミュンヘン東郊の住宅地を歩いていたが、やがて延々と畑の道を歩き、次いで森の小道に入った。アルプスのイメージがあるバイエルンも実際には平地が多く、時に緩やかな丘陵地帯が現れる。ミュンヘンは復活祭の頃まで雪が降っていたが、4月末になると日差しも強くなっていた。巡礼中の3日間は全て快晴で、筆者は既に最初の休憩時に背広の上着を預けるに到った。休憩は涼しい森の中で長椅子を並べて行われ、ワゴン車が運んできた飲み物やブレーツェが販売される。ビールは勿論アウグスティナーなどミュンヘンの銘柄のものであり、水は「炭酸入り」(spritzig)の「ペテロの泉」(Petrusquelle: キームゼー湖畔ジークスドルフの天然水)である。

最初の休憩時に、企画者から筆者の紹介があり、筆者も自己紹介と参加の趣旨を述べた。挨拶のあと多くの巡礼者が筆者に関心を持ち、食べ物などをくれたり、積極的に話しかけてくれたりする者も出てきた。中でも熱心だった60歳前後の男性は、前述の広島逸話を持ち出した後、「福島悲劇のあと、日本人もいい加減に永遠なるものに就いて考える必要がある」、「永遠なるものは神の母である」、「マリア様は我々が弱い存在だということをよく分かって下さっている」と言い出した。この男性は、日本の原子力発電所の事故は、原子爆弾と同じく、自分の知恵に溺れた愚かな人間たちへの神の罰と考えていた。またこの男性は、カトリック教徒ではない筆者がこの宗教行事に参加していることが、やや気になるようであった。

13時過ぎ、一行はエーベルスベルクの森の中にあるビールガルテンで昼食を取った。このとき筆者は男性参加者8人ほどと同じ食卓を囲んだが、そこで50歳ほどの黒人司祭が、連邦大統領ヨアヒム・ガウクの夫婦関係を「道徳的

問題」として批判的に取り上げた。前任者ヴルフの汚職疑惑による辞任で期せずして大統領に当選したガウクは、ドイツ民主共和国の民主化運動を指導したプロテスタント牧師で、シュタージ文書を管理する「ガウク機関」を率いた人物である。だがガウクは糟糠の妻と別居し、離婚しないまま別の女性と内縁関係にあった。ガウクが大統領就任に当たっても「戸籍の整理」をしなかったため、一体誰がドイツのファースト・レディーかという論争が起き、結局内縁関係にある女性がファースト・レディー扱いを受けることとなった。性道徳に厳格で、離婚を認めないカトリック教会の司祭が、こうした大統領の振舞を問題視するのは驚くに値しないが、この黒人司祭のドイツ語表現がやや率直過ぎたのか、他の白人巡礼参加者たちはこの発言にやや引いた感じとなった。どうやら巡礼者たちは、大統領の素行には意外に寛容なようだった。

もう一つこの会話で感じたのは、聖職者の権威に関することである。カトリック教会の儀式においては、司祭は十字架を先頭に、釣香爐を振りながら行列を組んで威風堂々と現れ、信徒に聖体を与える。その役柄を滞りなく果す限りでは神の仲介者としての威厳を保てるのだが、もし徒歩巡礼のように信徒と肩を並べて歩き、人間として触れ合うことになると、個人の癖が否応なしに見えてしまう。「開かれた王室」も開き過ぎるとカリスマ性を失って、王制そのものが存続の危機に陥るが、聖職者も霊的指導者としての威厳を保つためには平信徒に適度な距離を置く必要があるのかもしれないと思われた。参加者の一人はこの司祭に、「君 [Du] が祭服ではなく普段着でこうして一緒に歩いてくれるのは嬉しい」と親しげに話しかけている光景も見たが、お互いに慣れ過ぎると余計なものも見えてくるだろう。

巡礼一行は午後も歩き続け、18時40分頃に宿泊地マイテンペートに辿り着いた。マイテンペートの教会は、鐘を鳴らして我々の到着を歓迎してくれたが、意外にも教会堂には誰も居なかった。巡礼団に同行する黒人司祭二人によるミサの後、一行は修道院やホテルに分宿した。参加登録が遅かった筆者は、修道院ではなくホテルに回されてしまった。レストランでの夕食時、筆者は巡礼の参加者である年配女性及びその孫娘と食卓を囲んだ。この年配女性はエステルライヒ出身で、現在はミュンヘンに居住しているが、実はカトリック教

会は脱退しているという。この女性は元来カトリック教会の寄宿舎で生育し、巡礼で用いる祈禱文や聖歌は熟知しているが、教会の内幕を見て敬意が持たなくなっただという。だがそれでも時々教会の礼拝には顔を出し、「劇場のチケット代を払う感覚で」賽銭を払っているという。この巡礼への参加も、彼女は「スポーツ」だと語った。

巡礼2日目（4月29日）は、分宿していた一行がマイテンベートの教会前に5時30分に集結して始まった。朝焼けの中、遠くに雪山を望み、道祖神のように十字架上のイエス像が立っている丘陵地帯を、巡礼者は祈りながら進んでいく。やがて一行は途中の教会でミサを行ったが、今回も教会は歓迎の鐘を鳴らしてくれたものの、中には地元の司祭も信徒もいなかった。同行の司祭によるミサのあと、ブレッツェを頬張りつつ休息して、一行は再び歩き始めた。

田舎のビールガルテンでの昼食時、筆者は或る篤信の信徒と同席した。この信徒も、日本人の筆者がカトリック教徒でないことを気にしていた。筆者が歴史家の仕事に触れ、歴史家は事実を扱うが、真実は扱わないと述べると、それでは駄目だという。「王でない者が勝手に王を名乗っても王とは言えない」（バイエルン選帝侯マックス・ヨーゼフがナポレオンの恩寵でバイエルン王を名乗ったことへの批判か）、「人殺しをした医者はおもはや医者ではない」（人工妊娠中絶に手



マイテンベートのイエス像
（4月29日）



アルトエッツィング巡礼（4月29日）

を貸した医師への批判)、「それが真実であって、歴史家はそうした真実を扱わなければならない」。これに対し筆者は、「外国勢力の支援で勝手に王位に就いたり、胎児の生命を奪ったりすることへの道義的非難は有り得るが、歴史家としては善悪の彼岸に立っており、一定の手續を踏んだ上での王号は王号として扱うし、どんな悪事を働いても医師免許を持っている限り医師として扱う他ない」と述べたが、この男性はそれでは駄目だと言いつづけた。

なおこのとき隣にいた男性と、巡礼後ミュンヘンへの帰りに話す機会があった。彼は、この巡礼団には非常に信心深い人がおり、カトリック信仰を持たない者に違和感を持っているようだが、自分は自分が個人的にカトリック信仰で救いが得られると思うだけで、別な人が別な信仰を持っていてもそれは一向に構わないという。この発言は、余所者の筆者に対する配慮であるように思われた。

16時過ぎに見晴らしのいい土手で休憩したとき、孤立しがちな外国人の筆者のもとに、それを察してか40歳位の女性が寄ってきた。この女性は寡黙で、筆者の隣に来ても多くを語らない。厳格なカトリック教育を受けたといい、信仰に深く帰依している様子であった。この女性も筆者に、どうしてカトリックでないのか、少なくとも神への信仰はあるのだらうと、熱心に問いかけてくるので、筆者は返答に窮した。

巡礼も2日目になると参加者が疲労してくるため、この日は夕方にミュールドルフのホテルとの間でワゴン車によるピストン輸送が行われた。巡礼団は歩き続けるのだが、ワゴン車が迎えに来るごとに、疲労の度が強い参加者から乗車してホテルに向かうのである。早々とワゴン車でホテルへ向かう人もいる中で、筆者を含め一部は最後まで徒歩で進むことに拘った。先ほど話した女性も、かなり疲弊して集団から遅れ気味になり、殆ど逸れそうになるので、筆者はもうワゴン車に乗ってホテルに向かうよう勧めたが、彼女は中々応じなかった。最後の数名になった段階で、筆者はSバーンの中で話した夫婦から、十字架上のイエス像を担ってみないかと勧められ、しばらく試みた。かなり重量があり、腰のベルトで支えているとしても、これを3日間担い続けるのは相当な苦行だと思われた。ミュールドルフの目前まできたところで、結局我々最後の

集団もワゴン車に分乗してホテルに向かうことになった。

3日目(4月30日)は、5時の出発である。ミュンヘンまで78キロメートル、パッサウまで90キロメートル、アルトエッティングまで13キロメートルとの掲示がある。6時15分頃にテスリングの手前の広い野原まで来ると、隣の女性が、ここからアルトエッティングが初めて見えるよと教えてくれた。確かにテスリング駅の左の遙か向こうに、針金のように細い二つの塔(アルトエッティングのシュティフト教会のもの)が見えた。テスリング駅前で一旦休憩した後、一行は7時過ぎにテスリングの中央広場を通過した。アルトエッティングまで6キロメートル、教皇の生地マルクトウルまで25・5キロメートルとの表示がある。巡礼の最後の道のりは、ラッツィンガーの幼少期の足跡を辿る新しい巡礼路「ベネディクトゥスの道」(Benediktweg)の一部を為している。路傍には一里塚のように巡礼者を導く「○番塚」(Station)が立っている。徐々に町に近付くが、中々到着せず疲労感が募った。

8時40分に町に着くと、イエスの掛けられた十字架を持った黒服の司祭と侍者が一行を待っており、共に恩寵礼拝堂のある礼拝堂広場へと入っていった。巡礼の最高潮である。巡礼者は行列を整え、特に夫婦は並んで手を繋ぎ、聖歌を口ずさんで広場へと入っていった。各教会からは鐘が鳴り響き、空は快晴であった。一行は一旦恩寵礼拝堂まで行った後、カプツィン会修道院の聖コンラート兄弟教会(旧聖アンナ教会)に入堂し、巡礼を締め括る典礼を行った。

アルトエッティングの礼拝堂広場には、恩寵礼拝堂を中心に、各教会が並んでいる。広場中央の恩寵礼拝堂は尖塔を一つ有する小さな白い建物で、内陣は正教会のイコノスタスのような障壁で前後が区切られている。後半分は漆黒に塗られているが、前半分は金銀で絢爛豪華に装飾されている。筆者が初めて入った時には、ポーランドからの巡礼者がポーランド語の典礼を行っていた。奇蹟のマリア像は赤子のイエスを抱いており、円空佛のように質素で小さなものであるが、豪華な冠と衣装を着せられ、前半部の正面の壁龕に安置されていた。

バイエルンの風景には葱坊主風の塔が付き物と思っていたが、アルトエッ

ティングの礼拝堂広場には市庁舎以外それがなく、恩寵礼拝堂やシュティフト教会の塔が細長い尖塔であるのは意外だった。ティリー騎馬像がシュティフト教会の前にあったが、建立されたのがごく最近の2005年であるのには驚いた。

ミュンヘンへの帰りは電車であった。3日間も歩いた道のりであったが、電車で戻ると僅か2時間であった。

(2) アンデクス修道院での「三聖体祭」の見学

「聖山」(Mons Sanctus) と呼ばれるアンデクス修道院 (Kloster Andechs) は、ミュンヘン南西の湖アンマーゼーを見下ろす丘の上にある。元来この地にはアンデクス伯の居城があり、この一族が聖地エルサレム巡礼の際に齋したとされるイエスゆかりの「主の聖遺物」(Herrenreliquien: イエスの茨の冠、辱めるための王笏、拷問に使った若枝、汗を拭いた布など) が安置されたことから、バイエルン公エルンスト以来「聖山」の名を帯びるようになった。この一族は、チューリンゲン方伯妃の聖エリザベート、シュレジエンの守護聖人ヘトヴィヒなどを生んだが、やがて政治的事件に巻き込まれて没落し、アンデクスには1455年にベネディクトゥス会の修道院が建設された。バイエルンは「ベネディクトゥス会の地」(terra benedictina) と呼ばれるほど、同会の活動が盛んなところである。アンデクス修道院と聖山巡礼の習慣は、宗教改革による衰退や「世俗化」による一時廃止(1803年)を経験しつつも、のちに復活して今日に至っている⁴⁾。ドイツ政治研究者の間では、アンデクス修道院はキリスト教社会同盟(CSU)幹部が毎年恒例の「非公開討議」(Klausurtagung)を行う地として有名である。またミュンヘン市内では、修道院のビール「アンデクス」をしばしば見かける。筆者はCSUとの関連で以前からこの修道院に興味を懐いていたが、アルトエツティング巡礼の参加者から訪問を勧められ、更にミュンヘン大学教員宿舎で一緒に美留町義雄准教授(大東文化大学)から、かつて森鷗外がトゥツィング方面からアンデクス修道院への遠足をしたことを伺ったので、祭礼を見学しようと考えた。

アンデクス修道院はバイエルンの有名な巡礼地の一つであり、6月下旬の「三聖体祭」において巡礼は一つの頂点を迎える。「三聖体」(Dreihostien) は

この修道院の宝物の一つで、聖霊降臨祭後の三番目の日曜日に「三聖体祭」が行われるのである。2012年の「三聖体祭」は6月24日9時、巡礼教会での祝祭礼拝で始まった。この日は最高の晴天であった。ミュンヘン市内からアンデクスまでは、Sバーン(S8)で終着駅ヘルシングまで行き、そこからアンデクスまでバスに乗るつもりだった。しかし7時にアマリエン通の教員宿舎を出発したところ、日曜日はS8の接続が悪く、ヘルシング駅に着いた時には9時少し前となっており、バスは当分なかった。このため同じ目的で降り立った夫婦と共にタクシーに乗り、9時少し過ぎに現地に着くことができた。アンデクス山の頂上には小さな町があり、その中央に修道院がある。巡礼教会は既に修道士や信徒で一杯になっていた。司式はかつてフルダ司教ヨハネス・デューバのもとで補佐司教を務めた、バンベルク大司教ルートヴィヒ・シックが担当したが、このときの典礼様式は後述の「ローマ典礼(特別形式)」で、巡礼教会には「人民祭壇」がなかった。オーケストラ



アンデクス修道院での「ローマ典礼(特別形式)」(6月24日)

がモーツァルトのミサ曲を奏でるなか、華麗に装飾されたロココ教会において、上下二段に MARIA 像が組み込まれた金銀細工の中央祭壇に、大司教がホスティアや聖杯を捧げる様子には、通常のミサとは異なる厳粛さがあった。

教会内で聖体拝領が済むと、鈴の音と共に「三聖体」を入れた独特のピラミッド型聖体顕示台が登場し、オルガン演奏に送られて聖体行列が教会を出て行った。教会の外では鐘が高らかに鳴り響き、吹奏楽団が音楽を奏でている。天蓋の下で聖体顕示台を担ったのは、アンデクス修道院を統括する大修道院長ヨハネス・エッケルト(1969年生)である。天蓋の四隅を担うのは、バイエルンの民俗衣装に身を固めた男性四人である。聖体行列は、まず教会を出て坂を下り、修道院の売店の下の広場に設けられた臨時祭壇に向かった。この臨

時祭壇でも「ローマ典礼（特別形式）」の短い典礼（聖体讚美式）が行われた。ここで侍者は釣香爐を勢いよく振って、ぐるりと一回転させた。最後に聖体拝領を祝う聖歌が斉唱された。



アンデクス修道院の三聖体祭（6月24日）

Tantum ergo sacramentum
veneremur cernui,
et antiquum documentum
novo cedit ritui.
praestet fides supplementum
sensuum defectui.

かくも偉大なる秘蹟を
伏して拝まん
古えの式は過ぎ去りて
新しき祭式はなれり
願わくは信仰が
五官の不足を補わんことを。

Genitori genitoque
laus et jubilatio.
Salus, honor, virtus quoque
sit et benedictio!
Procedenti ab utroque
compar sit laudatio!
Amen.

父と子とに
讚美と喜びとあれ
また栄えと誉れと
力と祝福も
二位から出給う聖霊も
また共に讚えられ給え
然あれかし⁵⁾。

そののち更にラテン語の祈禱文が続いた。

祈禱が終ると、吹奏楽団がベートーヴェン交響曲第七番第三楽章の一節を奏中、再び坂を上って教会前を通過し、高台の質素な祭壇に向かった。この高台から望むこの日の田園風景は、晴天のため実に素晴らしかった。再び短

いローマ典礼の祈禱が行われた。聖体行列は教会に戻り、これで儀式は終りとなった。

儀式は丁度正午少し前に終了したので、巡礼者たちは修道院の食堂へと向かった。修道院自慢のビール「アンデクス」が次々と供されていく。先ほどの吹奏楽団が、テラスで軽快な行進曲を演奏している。食事も充実しており、特に香ばしそうなシュヴァイネハクセが魅力的であった。欲望に抗しかねて「アンデクス」1マースとシュヴァイネハクセを注文したが、先程タクシーで同乗した年配の男女（同棲しているが夫婦ではないという）と同席し、やや多すぎるシュヴァイネハクセを食べるのを助けてもらった。お互いの自己紹介をするうちに、更に勧められるビールを飲み過ぎて、這う這うの体で山を下りた。アンデクス修道院から東へ、シュタルンベルク湖畔のトゥツィングへは、昔森鷗外らが通った緑豊かな巡礼の道が延びている。修道院からしばらく離れ、聖山の全体像が見える田園の真ん中にイエスの掛けられた十字架が道祖神のように立っており、筆者はその背後の木陰でしばし昼寝して、酔いを醒まそうとした。しばらくしてやってきたトゥツィング行きのバスに乗ったが、酔い潰れてしまったため、森鷗外の通った道をよく見るができなかった。

(3) アルトエッティング「マリア被昇天祭」の見学

教皇ピウス二世が不可謬の教権で確定した教義に依れば、マリアは生きながら天に上げられたという。聖母マリア信仰の巡礼地アルトエッティングで、8月15日の「マリア被昇天祭」(Mariä Himmelfahrt)は巡礼の一つの頂点である。筆者は前回4月末の訪問で、「新宝物館・巡礼博物館——教皇ベネディクトゥス一六世館」を休館のため見る事が出来なかったため、いずれにしても再訪問を考えていたが、8月14日・15日にそれを敢行することにした。

マリア被昇天祭の中心的行事は8月14日深夜の「光の行列」(Lichterprozession)である。筆者は14日の昼過ぎにミュールドルフ乗り換えでアルトエッティングに辿り着いた。町は祭礼の前とは思えない静かな佇まいを見せていた。筆者はまず「教皇ベネディクトゥス一六世館」で巡礼に纏わる展示を見たのち、「光の行列」の予定を確認した。筆者はこの時点では、行事後にミュンヘン

に戻ることを考えていたが、行事がミュンヘンへの終電までに終わらないことが確認できたので、ホテルを探すことにした。恩寵礼拝堂の広場は日差しが厳しく、広場に面したホテルは見晴らしがよいものの、どこも暑そうであった。そこで広場からやや離れた「ガストホーフ・シャルナーグル」で45ユーロの部屋を取り、夕食時まで昼寝をした。部屋は質素であったが、壁に十字架や、聖体行列の木版画が掛かっており、明らかに巡礼客用だった。

まだ明るい6時頃、夕食時に有名な宿屋「ガストホーフ・ツール・ポスト」でケーゼ・シュペッツレを食べていると、俄かに市長、司祭、修道士、警官などが集まってきて、すぐ横の、赤い垂幕で飾られた市庁舎の前で何か行事が始まった。尋ねてみると、ポーランド公使（女性）の歓迎式典ということだった。バイエルンの民俗衣装に身を包んだ吹奏楽団がバイエルン分列行進曲を演奏した後、同じく民俗衣装の15人の鉄砲隊が、指揮官の合図で3回の祝砲を打ち、続いて吹奏楽団がポーランド国歌（ドンブロフスキのマズルカ）、バイエルン国歌、ドイツ国歌、ヨーロッパ連合曲（ベートーヴェン第九交響曲）の順に奏で、一同は市庁舎の中に入っていった。そういえば、アルトエッティングでは前回訪問時にもポーランド人巡礼者が目立っていた。

恩寵礼拝堂から200メートルほどのところにある聖アンナ・バジリカで20時過ぎから祝祭典礼が行われ、それに続いて「光の行列」が行われた。明るいうちは静かだったバジリカ周辺は、暗くなるに連れて賑わっていった。ホテルは満室ではなく、電車もなくなる

見込みだったので、参詣者は自家用車で来る人々、主に近隣住民のようである。恩寵礼拝堂の前には、のちに登場するマリア像のために電照の光背が設けられている。周囲を見学して回っているうちに、バジリカ内部には既に座れる席がなくなってしまった。祝祭典礼に際しては、



マリア被昇天祭前夜の「光の行列」（8月14日）

数々の団体に先導され、奇蹟のマリア像が恩寵礼拝堂から司祭に抱かれて、バジリカまでやってくる。ミサはフランス系の高位聖職者がやや癖のあるドイツ語で司式した。21時30分頃ミサが終ると、イエスを抱いたマリア像を先頭に、蠟燭に火を燈した参詣者たちがバジリカから出ていき、恩寵礼拝堂の周りを回って広場一杯に光の輪を作った。4月の徒歩巡礼のときと同じく、参詣者たちはマリア像を抱く司祭の先導で「天使祝詞」などを唱え、「栄唱」を歌う。マリア像は前述の電照の光背の前に安置され、人々はマリア像の前に集まっていく。最後に全員がマリア像前に集結し、行事は22時20分に終了した。

8月15日9時半過ぎ、晴天の下人々は恩寵礼拝堂前に再び集まった。恩寵

礼拝堂には、聖母マリアの恩寵に感謝する絵馬 (Votivbild) がびっしりと張り付けてある。絵馬の年代は数百年に及んでおり、独仏戦争の勝利を感謝するものもあった。最近のものでは、林業や農業の作業中に、あるいは交通事故で大怪我し、それが神の母のご加護で速やかに治癒した、マリア様のご加護で手術が無事に終わった、大地震から生還したという様なものが目に付いた。礼拝堂の周りには、お祝いの花束を売る人も現れた。10時に司祭に抱かれた奇蹟のマリア像が恩寵礼拝堂から姿を現した。この聖像を掲げる司祭は、まるで傀儡師のようである。昨日に引き続き晴れ渡った広場を各教会の鐘が鳴り



アルトエッティング恩寵礼拝堂の感謝絵馬
(8月15日)



マリア被昇天祭の「黒きマドンナ」渡御 (8月15日)

響く中、十字架を先頭に諸団体に先導されたマリア像が、再び聖アンナ・バジリカに向かっていく。バジリカでのミサが終わった後、12時にマリア像は恩寵礼拝堂に戻って、行事は全て終了した。

注

- 1) Brief von Max Weber an Marianne Weber, Wolfratshausen [19. Juni 1919], in: MWG II/10, S. 654; Eberhard Demm (Bearbeiter), Geist und Politik. Der Heidelberger Gelehrtenpolitiker Alfred Weber 1868–1958, Heidelberg 2003, S. 28 f.
- 2) Stefan König, Altötting. Wallfahrts- und Stadtgeschichte. Stadtführer, 2. Aufl., Altötting 2008.
- 3) 『カトリック聖歌集』第9版（光明社、昭和59年）、190–191頁（筆者が³一部修正）。
- 4) Birgitta Klemenz (Hrsg.), Kloster Andechs, 2., völlig neu bearbeitete Aufl., Regensburg, 2005.
- 5) 『カトリック聖歌集』第9版（光明社、昭和59年）、338–339頁（筆者が³一部修正）。